

# 与薬インシデントを減少させるための取り組み

浅田 道幸  
Michiyuki Asada

佐々木京子  
Kyoko Sasaki

NHO 旭川医療センター 看護部医療安全小委員会

## 要 旨

当院では与薬に関するインシデントが前年度 700 件中 225 件と内容と分類別では一番報告が多く、例年トップを占めている現状である。与薬に関するインシデントの要因として確認不足が一番多く、他に業務繁忙により与薬手順を守っていない等がある。確認不足の原因について与薬準備・実施のどの手順でインシデントが発生しているのか明らかにされていない。与薬準備・実施のマニュアルがどの段階で遵守されていないのかを明らかにし、与薬のインシデント減少につなげる。

キーワード：与薬 マニュアル 標語

## I はじめに

当院では与薬に関するインシデントが前年度 700 件中 225 件と内容と分類別では一番報告が多く、例年トップを占めている現状である。与薬に関するインシデントの要因として確認不足が一番多く、他に業務繁忙により与薬手順を守っていない等があった。確認不足の原因について与薬準備・実施のどの手順でインシデントが発生しているのか明らかにされていない。

### I 目的

与薬準備・実施のマニュアルがどの段階で遵守されていないのかを明らかにし、与薬のインシデント減少につなげる

## II 方法

自作の質問紙調査

対象は病棟看護師

調査期間 取組実施前 5月13日～5月26日

取組実施後 9月11日～9月28日

分析方法 ①強化期間前5月、質問紙にて調査する。

②与薬手順を遵守されていない部分を明確にする。

③標語作成し、標語による7月8月強化期間を設定する。

④強化期間後9月、質問紙にて調査する。

⑤強化期間前後の比較分析をする。

⑥前年度の同時期と比較分析する。

浅田 道幸

NHO 旭川医療センター

〒070-8644 北海道旭川市花咲町7丁目4048番地

Phone:0166-51-3161,Fax:0166-53-9184 E mail:asada.m@asahikawa.hosp.go.jp

質問紙（図1）と標語（図2）の内容を示す。

### 倫理的配慮

A病院臨床研究倫理委員会の承認を得ている。個人が特定できないよう配慮するなどプライバシーを保護する。アンケートの回収をもって同意とした。

## Ⅲ 結果

強化期間前の質問紙配布数は162枚、回収率91%。強化期間後の質問紙配布数は163枚、回収率88.9%であった。

「薬の準備の遵守」については強化期間前後ともに、各項目に大きな差はみられなかった（図3）。「内服実施時の遵守」については①フルネームで確認する②薬を説明し配薬するが強化期間後「できている」と増加した（図4）。

### 質問紙の内容

与薬手順調査							
経験年数	新人	2～5年	6～9年	10年～19年	20年以上		
	( )	( )	( )	( )	( )		
薬の準備	①薬を準備する場所は適宜に広いが、電話やナースコールなど遠くはないか 作業の中断にならないような準備を講じているか ②患者が服用している全ての薬袋とフルネームを記載した薬杯を準備し、 指差し呼称で患者名が一致しているか確認する ③日時、薬剤名、用法、容量、服用回数指差し呼称で確認する ④薬袋から薬剤を取り出し、残数を確認し、薬袋に記載する ⑤全ての薬袋から薬を取り出したか数を確認する ⑥残りの薬袋の服用日時に間違いがないか再確認する					している	していない
実施	①患者の所へ薬杯を持参し、患者名をフルネームで呼び、ベッドネームも 合致しているか指差し呼称で確認する ②何の薬であるか説明し、配薬する ③内服確認のため、薬量飲み込み確認・介助、もしくは空のビードを 確認する						

「薬の準備」で一筆気をつけているところはどこですか?①～⑥から選んで下さい。( )

「実施」で一筆気をつけているところはどこですか?①～③から選んで下さい。( )

図1

### 標語の内容

7月/8月内服薬誤薬防止強化月間

**【薬の準備手順】**

- ①集中できる場所を選択し、準備する
- ②作業中断時は始めから薬の確認をやり直す
- ③薬袋と薬杯の患者名が一致していることを指差し呼称で確認する
- ④日時、薬剤名、用法、容量を指差し呼称で確認する

看護部医療安全小委員会

図2

「薬の準備で気をつけていること」は③薬袋の内容を指差し呼称で確認する②患者名を指差し呼称で確認することが多く（図5）、「内服実施で気をつけていること」は①フルネームで確認する③服薬を確認するという事が多かった。前年度と今年度の同月の7月、8月を比較した結果、平成26年度7月22件、8月21件で、患者数に対する割合も10.2%、10.1%であったのに対

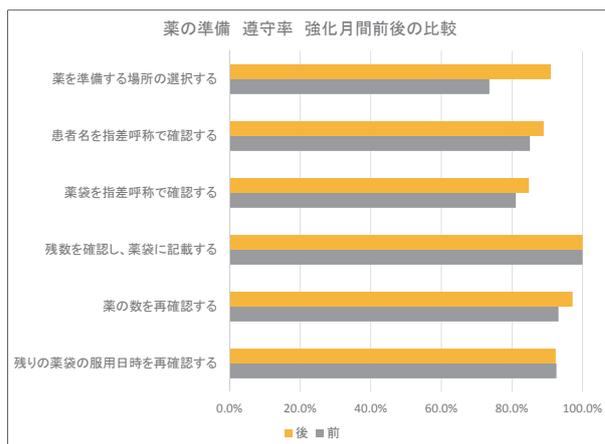


図3

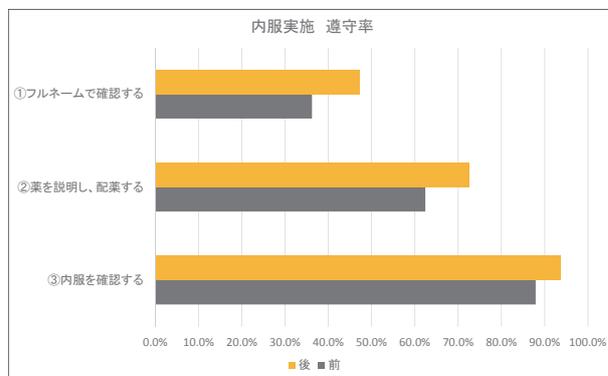


図4

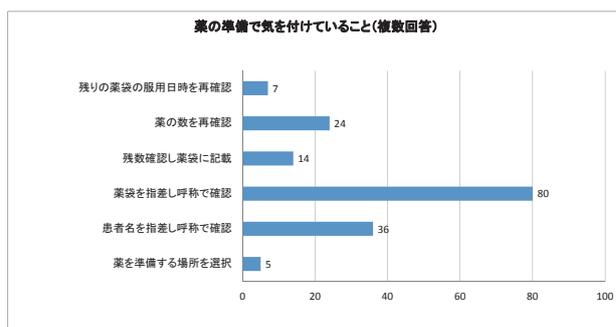


図5

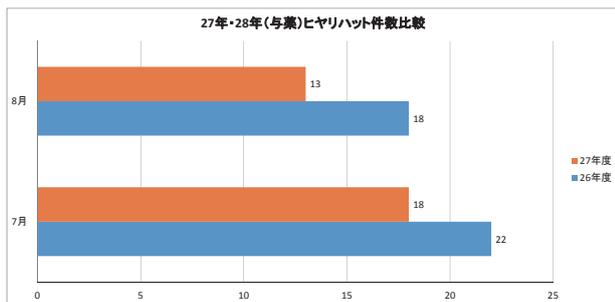


図 6

し、平成 27 年度は 7 月 18 件、8 月 13 件であり、割合も 7.7% から 6% へと減少した（図 6）。

#### IV 考察

与薬手順調査前後では大きな差はみられなかった。しかし、調査を行うことで看護師の与薬に対する手技の振り返りにつながったと考える。また、一定期間標語を掲げることで誤薬防止に対する意識づけにつながったと考える。前年度と今年度の同時期の比較をした結果、7 月・8 月のヒヤリハット件数が前年度より減少していたため誤薬防止強化期間の設定は効果があったと考える。

本論文の要旨は、日本医療マネジメント学会第 15 回北海道支部学術集会（2015 年 10 月 17 日、札幌）にて発表した。